

# 大宮 まほろし 新聞

Vol.018  
2024年3月1日発行  
OMIYA LIBRARY

## 図書館のご近所さん 押田謙文堂

寒風吹きすさぶ受験シーズンの真っ只中、書籍の販売はもちろん教科書販売や北辰テスト、検定等の申し込みでお馴染みの押田謙文堂を訪れました。  
押田謙文堂は1880年（明治13年）に現社長である高田洋子（たかだようこ）さんの曾祖父・押田仙助（おしだせんすけ）さんが与野本町で創業しました。祖父の押田謙二郎（おしだけんじろう）さんが昭和10年頃に大宮に出店。現在の場所を空襲にも見舞われましたが、荷車で与野まで売り物を運んで避難したという商魂逞しい先祖のおかげで現在まで大宮駅東口の大宮銀座通りで地域の書店として親しまれています。大宮銀座通りは元々川越新道という名称でした。しかし、戦後これが発展していくのによりその町の名称はふさわしくないということで、商店の人々の提案により全国で繁華街の代名詞として広く使われている「銀座」の名が付けれられ昭和22年から正式に大宮銀座通りと呼ばれるようになりました。道路を舗装し、街路樹に柳が植えられたこの通りは、かつてアーケードがあり、個人商店も多く活気に溢れていたそうです。現在4代目社長の高田洋子さん。大宮で生まれ育ちここ地元大宮には一方ならぬ想いがあります。現在進行中の再開発にも複雑な気持ちがあるとか。



→タイボグラフィが踊るブックカバー  
↑ステンドグラス



「アンティークの机  
児童書コーナーではクマがお迎え」  
お出迎え」  
ています。その他に勧めの商品を展示しているテーブルはなんとアンティークのもの。わざわざ社長ご夫妻で買い求めたそうです。  
さて、店舗奥の階段にはキラキラと輝くようなステンドグラスが！オータメイトステンドグラス制作工房「ステンドグラスパロク」の作品で、専務取締役の高田晴夫（たかだはるお）さんが原案をデザインされました。ブルーを基調とした清々しい印象でとても美しい。これは一見の価値あり！  
2階は主に文具や参考書、児童書、コミックがあります。文具の棚は明るい木目調で外国製のおもちゃが飾られています。以前、大宮まよっちょ新聞Vol.12で紹介したToy Toyのおもちゃもディスプレイされていました。そして奥には大宮銀座通りに面したひときわ大きな窓ガラスがあります。窓際に立つと眼下に通りを行きかう人々を見ることが出来ます。本には紫外線が大概でこんな大きな窓は珍しいですが、開放感があるってふわりと入ってくる光の中で本を選ぶことができる素敵な場所です。

3階は法律や各種資格書など専門書が、そして4階にあがる教科書がずらりと並んでいます。教科書販売は、限られた書店しか取り扱っていることが多く大宮区では押田謙文堂を含め数社所のみ取り扱いです。販売するにはその保管場所も必要なのだと。また、創業の地、与野本町では、中央区の教科書販売を担っています。本は、一般のお客さんのみならず、学校や図書館、区役所、美容室、病院などにも配達しています。昔からの馴染みのお客様にもお届けしていると感じ、個人商店ならではのきめ細やかなサービスだと感じました。  
ICTの時代になっても紙は必要！と説くお2人。大正時代から変わらない売り方で今まで続けてこられているのは、地元の人達との繋がりを大事にして、文化を絶やしてはいけないという想いの強さがあるからなのだと取材を通して伝わりました。  
参考図書  
『大宮銀座通り80年のあゆみ』  
大宮銀座通り商店街協同組合/編  
大宮銀座通り商店街協同組合 1974年



一高田夫妻



押田謙文堂  
住所 所さいたま市大宮区宮町1丁目18番地  
【電話】048-641-3141  
【営業時間】10時～19時  
（日祝は18時30分まで）

本屋さんが読んでいる本が気になったので訊いてみました！  
ご紹介いただいた本  
教科書に載っていたの覚えてる人も多いのでは？  
『スイミー』ちいさなかしこいさかなのはなし  
レオ・レオニフ作 谷川俊太郎/訳 好学社 1979年  
9回出撃し、9回生還した特攻兵のか  
『不死身の特攻兵』軍神はなぜ上官に反抗したのか  
鴻上尚史/著 講談社 2017年  
危険を隠したその先にあるものとは  
『大惨事と情報隠蔽』原発事故、大規模リコールから金融崩壊まで  
ドミトリ・チエルノフ、ディディエ・エッセネット/著 橋本明美、坂田雷子/訳 2017年  
戦後日本の歴史と謎  
『日本はなぜ「基地」と「原発」を止められないのか』  
矢部宏治/著 集英社インターナショナル 2014年

### ゆかりの人物コーナー

#### 「秋山静子」 「ふるさとを描くⅡ」より 「大宮の景色」

旧大宮市の景観は、時代の流れとともに大きく変わりました。自然豊かな緑が多くあった場所も、今は道路や家屋などが建ち並んでいます。旧大宮市出身の秋山静子（あきやましずこ・1940年）は、変化し成長していく市内を描き続けた女性画家です。市内を中心に活動され、大宮市文化賞をはじめ数々の賞を受賞、展覧会への作品の出品や個展の開催をしていきました。  
「好きなことをずっと続けたい！」「絵を描き続けたい！」という思いをもとに、美術学校に進み卒業したのち、絵画教室に専念する中で、大宮の景観を描きつづけてきたのは、絵画教室の先生から「大宮も変わるみたいよ」という一言。当時（1980年代）大宮駅周辺は都市計画に伴いビル建設や新幹線開通工事などが行われ、街並みが大きく変わっていました。「自分の街を記憶したい！」との思いから、1983年より「景色」を描き続けてきたそうです。  
作品はどれも繊細で、まるで当時の風景の中に入り込んでしまったかのような錯覚を覚えるほど。知らなかつた風景もあり、懐かしさとともに驚きも感じます。もう見ることができない、失われていく景色に少し寂しがる時もありますが、絵画として記録しておくことで、その時代その場所の空気や温度、質感までも残しておくことができるのですね。

参考資料  
『ふるさとを描く大宮』  
秋山静子/著 秋山静子/出版 1987年  
『ふるさとを描く大宮Ⅱ』ソニックシティからさいたま新都心へ  
秋山静子/著 秋山静子/出版 2008年  
『埼玉の女性 完全保存版』サイシップ 2004年

## 大西民子の一首

### バス降りて十字路よぎり来る君よ 夕陽の中の われに手あけて 『まほろしの椅子』

民子は1947（昭和22）年、自分と同じ金石市内で教員をしていた大西博と出会い結婚します。この歌に出てる「君」とは、恋人だったころの博だと思われます。想い人を詠んだロマンチックな歌ですが、戦後もない頃は恋の歌を発表すると反感を買うこともあったとちに民子は語っています。

# 意外と力仕事です



兄いがかれこれ半年か...

今頃どうしているのらう...



あつ! あに...

!?



あ、兄い... その体は...!!

図書館の毎日だったよ



そして強靱な身体を手に入れたのさ!!

怖え...

紹介した本  
『ゴルドンストラバー A MEMORY』  
伊坂幸太郎 著 新潮社 2007年



## 名言 見沼の流れと万葉の小径(こみち)、桜並木



田んぼに恵みの水を送る見沼代用水の西縁には、流れに沿って万葉集に登場する木々が植えられている「万葉の小径」が寄り添っています。さいたま市が誕生してから「見沼たんぼ桜ロードプロジェクト」によって植樹された並木道は、「見沼田んぼの桜回廊」として総延長20km越えのお花見散策スポットです。

## わたしのすきなほん

息子が1歳になった頃、近所の児童館に通い始めました。育児書にならって生活リズムを整えたい、と考えていたからです。息子にお友達を作らあげたい、私もママ友に出会いたいとも願っていました。

先生方は優しくったのですが、児童館のアットホーム過ぎる雰囲気には私達はすぐに馴染めず息子は私の膝の上に座ってばかり。慣れない場所で、知らない大人や赤ちゃんに囲まれて心細かったのかもしれない。私には元気いっぱい遊ぶお友さんが羨ましく見えました。

ある時「絵本を読みますよ」と先生が声をかけてくれました。それは『おおきなかぶ』でした。私たちの他に数組の親子が集まり、お話を始めます。なかなか抜けないかぶに、みんな夢中! 子供達がはしゃぐ様子を見て、先生は「うんとこしょ どっこいしょ」の部分は何回も繰り返します。大人も子供も「うんとこしょ どっこいしょ」と一緒に繰り返しました。

言葉選びの素晴らしさ、挿絵の力強さ、いつの時代も色あせない物語の面白さが魅力的な『おおきなかぶ』。昔話をもとにした長く愛される絵本なので、読んだことはありましたが新たな発見がありました。

その後、幸いにも児童館で知り合った親子と仲良くなり、毎日一緒に遊ぶようになりました。

絵本は一人で読むのも、親子で読むのもいいけれど、読んでもらってみんなで聞くと楽しさがふくらむのだな、と気づかせてくれた1冊です。



紹介した本  
『おおきなかぶーロシアの昔話ー』  
A.トルストイ/再話  
内田莉紗子/訳 佐藤忠良/画  
福音館書店 2007年



大宮図書館 ホームページ  
大宮図書館 X (@tomiya)

Xではイベントやスタディーコーナーの待ち人数など大宮図書館の情報を日々つぶやいています。ぜひ、フォローしてみてくださいね!



紹介した本  
『あたしの一生 猫のダルシーの物語』  
ディレクター 著 江國香織/訳  
飛鳥新社 2000年

紹介者 トントキ

## 歴史部

## 自転車の起源と認識のズレ

人力最速の乗り物「自転車」。皆様は自転車の起源と言われてどのようなフォルムを想像されるだろうか。「前輪が大きくて後輪が小さい。前輪にペダルがついているアレ」。実はそれ違うのだ。

自転車の起源は「ドライジーネ」と呼ばれる乗り物で、1817年ドイツのドライス伯爵によって発明された。2つの同じ大きさの車輪を前後に配置し、その間にまたがって地面を足で蹴って進む乗り物である。その後、ミショー親子により前輪にペダルを付けた「ペロシペード」が誕生し、ジェームズ・スターレーらが1870年に、ペダル付きの巨大な前輪に極端に小さい後輪の「ペニー・ファージング」を開発した。そう! 多くの皆様が想像していたであろう自転車はこの「ペニー・ファージング」である。

ではなぜ、皆様が「ドライジーネ」ではなく「ペニー・ファージング」を自転車の起源とらえてしまっているのか。おそらくそれはペニー・ファージングのデザイン性の高さではないだろうかかと私は考えている。前輪と後輪の極端な大きさの違い、フレームやタイヤを含めた流線的な美しいフォルム。それに比べ地味な見た目の「ドライジーネ」は印象に残りにくい。

ちなみになぜ前輪が大きく後輪が小さくなったのか、その理由はスピードである。車輪を大きくすれば速く走ることがわかり、前輪を大きくし乗車する際のバランスを取りやすくするため後輪を小さくしたのだ。

現代の自転車ロードバイクと昔の自転車ペニー・ファージング。どちらもスピードを求めて進化したのに、似ても似つかない形になったのはとても興味深い。



参考文献  
『50の名車とアイテムで知る図説自転車の歴史』  
トム・アンブローズ/著 甲斐理恵子/訳  
原書房 2014年  
『ずかん自転車一見ながら学習調べてなっとく〜』  
森下昌市郎/著 自転車文化センター/監修  
技術評論社 2023年  
『自転車ものがたり』  
高頭祥八/文・絵 福音館書店 2016年

動物と一緒に暮らしているひとの多くが思っているであろう。「この子がいなくなってしまうたらどうやって生きていけばいいのか」と、猫たちが誕生日を迎えるたびに人間より短いその寿命を思い、せつなく鼻の奥がツンとしたりする。

動物を人間の都合にあわせて生活させるのはエゴだと思っただけが、その償いのようにわたしは目いっぱい愛情を猫にそそぐ。夏は人間不在の部屋のクーラーをつけておき、冬はあったか電気クッションのスイッチを入れて出かける。そのうち留守中に停電になったらどうしようとお口オロオロ考える。勝手に愛情を押しつけて、当の猫には迷惑なこともあるかもしれない。まったく人間の都合である。

この本は「あたし」と猫のダルシーの視点で、彼女が生まれてから死ぬまでが語られている。自身の不慮の事故や、生きていたら避けられない病や老いの描写には胸が苦しくなるが、生き高いダルシーの語り口には「ああ、こんなとき猫はそんなふう考えているのか」と思わせる。

猫の視点であるから飼い主は「あたしの人間」ということになる。「あたし」と「あたしの人間」の17年4ヶ月と1日の物語は、人間からの愛情はけっして一方通行ではなく、おたがいに心の深いところまで寄り添って生きていくのだと安心させてくれる。いつか必ずお別れの日はやってくるけど、一緒に暮らすことは猫にとっても人間にとってもかけがえのない贈り物なのだと思わせてくれる。

ダルシーは著者と暮らした実在した猫である。ダルシーの行動の細やかな描写や、嫉妬や憎悪、欲びなど豊かな感情の表現は著者の精緻な観察によるもので、読む者は猫の体温を感じるだろう。ダルシーが人間に残したまっすぐな愛と、著者のダルシーに対する無償の愛がこの作品を生んだのである。次のテーマは「愛情」で。

## 読書パトロール

## 第13回 テーマ 『寄り添う』

この刊行物の書影画像はBOOKデータASPから引用しています。